住友財団修復助成30年記念　特別企画

文化財よ、永遠に

修理工程ガイド

仏像修復の現場から

文化財は、それを大切に守り伝えようとする人びとの意志とともに、繰り返し修理が行なわれてきたことによって、いまに伝わります。

現在、日本の文化財の修理では、「現状維持」が原則となっています。つまり、これ以上損傷や劣化が進行するのを抑えることを目指します。新しく色を塗ったり、金箔を押したりすることは基本的にしません。修理の前と後で見た目にはあまり変化がないように見えることも多いです。こうした文化財の修理は地道な作業ですが、文化財を永く保存していくために不可欠です。

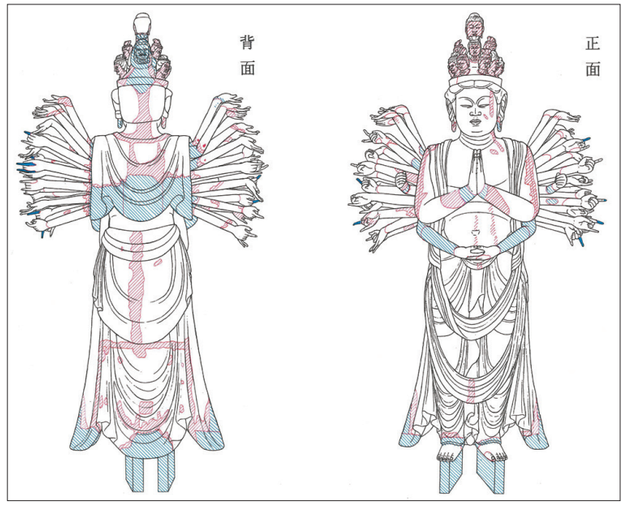
けれども、「現状維持」の原則が浸透する以前の修理では、傷んだ像の装飾のため新たに色を塗ることもありました。福井・高成寺の千手観音菩薩立像の場合、近世の修理で塗られた白い色（胡粉）に覆われて、つくられた当時の像とはまったく別の像のように見えていました。そこで平成の修理では、当時の造形がわかるように、彩色を取り除き、面目を一新しました。

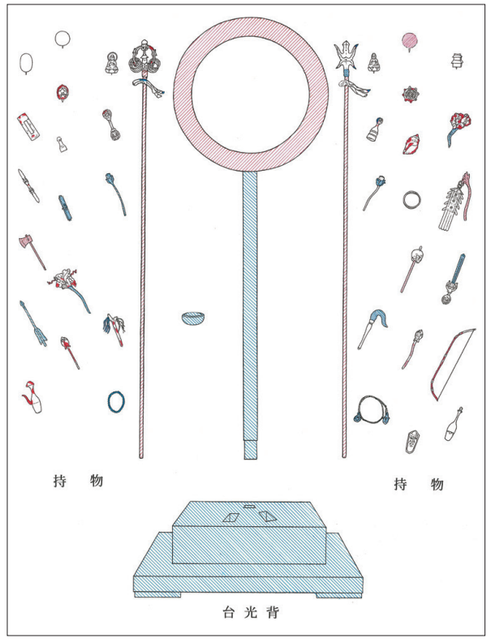
仏像がどのように修理されるのか。その作業を、高成寺像を例にとってご紹介いたします。

重要文化財　千手観音菩薩立像
木造、彩色　像高186.0cm　平安時代・9世紀　福井・高成寺
修復年度：平成9～13年度　修復事業者：公益財団法人美術院
Important cultural property **Thousand-Armed Avalokiteśvara**
Wood, colored; H. 186.0 cm; Heian period, 9th century; Kojo-ji Temple, Fukui

★3 報告書作成

修理の記録





修理箇所を記した図面（公益財団法人美術院作成）

補修箇所

新補箇所

仏像を永く守り伝えるため、各時代の考え方で修理が繰り返されてきました。

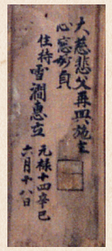
文化財の修理は、将来、再び修理されることを前提にして、その作業を行なう必要があります。以前の修理の経緯や作業、つまり、どのような理由で、どんな材料を用いて、どのようにして作業を行なったのかという情報が、次の時代における修理の重要な手がかりとなります。

そのため、修理状況が詳細にわかるように、修復事業者が図面や写真などを交えて報告書として記録を残します。こうした修理記録は、文化財とともに残し伝える大切な情報なのです。

修理を重ねる歴史

高成寺の千手観音菩薩立像の背面の裾の部材の内側に、過去の修理の際に記されたとみられる墨書があります。平成の修理で、解体作業の際に見つかりました。これは、江戸時代の元禄十四年（一七〇一）に大規模な修理があったことがわかる、貴重な銘記です。

大慈悲父再興施主
心窓妙貞
住持雪澗恵立　元禄十四辛巳
六月十八日



解体。背面の裾の部材の内側に墨書が記されていた

住友財団

住友財団は、住友グループ20社の基金拠出によって、平成3年（1991）に設立された公益財団法人です。

住友の事業精神である「自利利他公私一如」、すなわち「住友の事業は住友だけでなく、国家、社会を利するほどの事業でなければならない」を活動理念としています。この理念にもとづいて、芸術的、学術的に価値のある文化財の維持・修復事業の助成を行ない、これまで累計1,100件以上の修復に貢献してきました。

仏像の修理には熟練した技術が必要です。その技術の継承や人材の育成などには、たくさんの費用や時間がかかります。仏像をはじめとして、修理を必要としている文化財は、まだまだ数多く存在しています。住友財団は国内外への助成によって、未来へ向けて文化財保存・修復の取り組みを続けています。

TNM
住友財団修復助成30年記念　特別企画　文化財よ、永遠に　修理工程ガイド　仏像修復の現場から
執筆：増田政史／デザイン・制作・印刷：精興社／編集・発行：東京国立博物館　令和元年（2019）10月1日発行
©2019東京国立博物館

彫刻の修理工程

修復設計
所蔵者、行政、修理者が相談のうえ、対象の構造や保存状態を調査し、修理内容の決定や施工金額を算定します。

搬入、燻蒸
対象を、安置場所から工房へと搬入します。搬入が完了すると、燻蒸が行なわれることが多いです。

調査、清掃
作業前の現状を写真撮影し、記録に残します。修理対象の表面に付いた埃や汚れを落とすための清掃をします。

解体 ★1
構造的に危険が生じているものについては、解体作業を行ないます。全解体をする場合もありますが、部分的に矧目を離すだけの場合も多いです。

剝落止め ★2
剝離しそうな彩色や漆箔層を止め、剝落した彩色片や漆箔片はもとの場所に戻します。

虫損・朽損処置
虫蝕による孔を、合成樹脂と木粉や顔料を混ぜ、色合いをあわせた充塡剤を注入して埋めます。

構造補強・新補
構造的に不安がある場合は、補強を行ないます。

接合・組み立て
部材ごとの処置がすべて終了すると、矧目を再接合して像を組み上げます。

仕上げ
補作部分は、像全体の調和をはかるために、周囲にあわせた色を着色して仕上げます。

搬入・安置
修理完了後、所有者あるいは管理者が指定した場所に安置します。

報告書作成 ★3
誰がいつ、どのような修理を、どのような材料を用いて行なったかを後世に伝えるために、写真や図解を交えて詳細に記録します。

高成寺 千手観音菩薩立像の修復

福井県小浜市にある高成寺の千手観音菩薩立像は、制作年代が平安時代・九世紀にさかのぼる貴重な作例です。修理にあたっては、本像の場合も、基本的に一般的な彫刻の修理工程に沿って作業が行なわれました。ここではとくに、特徴的な作業であった「脇手の解体」と「彩色の除去」を中心に紹介します。

● 平安時代後期
● 中世（鎌倉時代から室町時代）
● 江戸時代

★1 解体 脇手の解体
高成寺像の脇手は、すべて後の時代につくり直されたものです。そのなかには、平安時代後期のものや中世（鎌倉時代から室町時代）のもの、江戸時代のものがあります。各脇手の位置や順番を確認しながら、一本ずつ取り外して解体しました。

各時代につくり直された部分は、この像の修理の履歴でもあります。その履歴は、仏像がたどってきた歴史そのものであるため、これらの脇手は補修して接合し直しました。現在行なっている修理は「現状維持」を原則としますが、像全体の印象と大きく合わなかったり、部材が修理できないほど傷んでいたりする場合には、つくり直すこともあります。

修理方針は慎重に検討する必要があるのです。

一木造
一木造は頭と体の中心部を一つの木材から彫り出す技法です。高成寺像は頭から脚部までが一材で、足先や合掌する両手首から先、左右の脇手、頭上の11面、背面の一部などが別の材でつくられています。

像がつくられた平安時代の作風とは異なった色使いの彩色がほどこされていました。

竹の篦などを使って表面の彩色を取り除く作業

全体の彩色を取り除いて、細部を仕上げ、頭上の11面を取り付けました。

★2 剝落止め 彩色の除去
基本的に修理に際しては、表面の彩色や漆箔層がとれそうな箇所は止める作業をします。しかし、高成寺像は、後の時代に塗られた彩色によって、像のもともとの顔の表情がよく見えなくなっていました。そのため、彩色を取り除く作業を行ないました。

修理前

修理後